

雁行空間 ずれがつかる連続性

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB1139 柴 明紗美

1.背景 「外観と内部の関係性」

雁行のようなずれた配置の外観に魅力を感じた。雁行とは配置形式のことで外部に対して効果を得るためのものだが、その「ずれ」が内部にも影響を及ぼしているところに興味をもった。

2.雁行とは

一般的に雁行とは、「雁が飛ぶ時の列の形のように、ななめに並んで行くこと(Fig.1)」をいう。建築的には「建物がななめにずれて連なって配置されているさま(Fig.2,3)」のことで、性格の違う棟がずれてつながることで半独立的に存在しながら関係して、全体としてはまとまりをもたせることができる。



Fig.1 雁の飛ぶさま



Fig.2 桂離宮



Fig.3 臨春閣

3.調査 「二条城」

遠侍、式台、大広間は公的な空間である。そのため、ずれ幅が少なく緩やかに繋がっている。しかし、蘇鉄の間を介して、その先にある書院は廊で繋がっているため、繋がりの幅が急に狭くなる。ここで手前の公的空間とは違って私的空間に入ることを見通しの悪さや狭い廊を歩くことで感じ取らせる(Fig.4)。

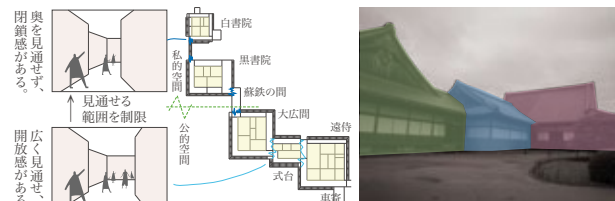


Fig.4 二条城

4.1.分析 「見え隠れ」

雁行形では「見え隠れ」の操作により、格式を意識させる空間ができています。奥まで見通せているのにそこに至るまでに死角部分があると先に行きづらさを感じる。死角部分は視点が移動する度変わってくるため、見える点、見えない点はグラデーションのようにあやふやになるが、死角部分は絶えず存在している(Fig.5)。

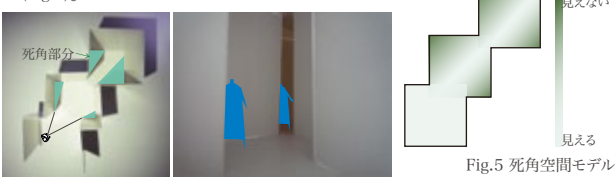


Fig.5 死角空間モデル

4.2.分析 「つながり」

性格の違う棟 緩やかにつながる 公的で晴れ向きの空間や、私的で生活色の濃い空間、茶室などの特別な空間など互いに性格の異なる棟を直接的に繋がらず、ずらして配置することで緩やかにつないでいる(Fig.6)。

Fig.6 ずらしてつなぐ



Fig.7 つながりモデル

繋がりの幅を変化させることで隣り合う棟との関係も変化する。繋がりの幅が広くなるにつれその境目がぼやけ、境界が薄れていくため、一室的な空間に近づいていく(Fig.7)。

5.設計 「多重雁行住宅」

複数の雁行を組み合わせることで二世帯住宅を設計する。棟同士の繋がりの幅と、見え隠れを操作することで、仕切りをつかわず領域をわけながら、全体を連続させた(Fig.8-13)。

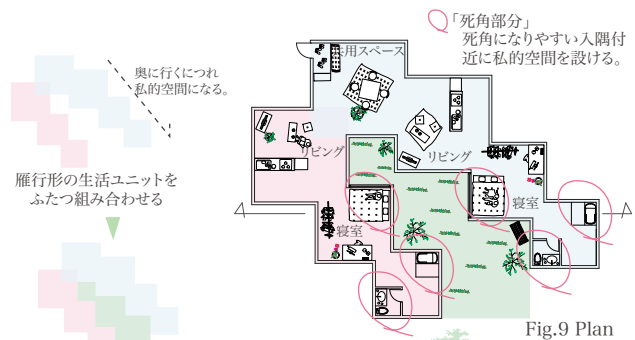


Fig.9 Plan

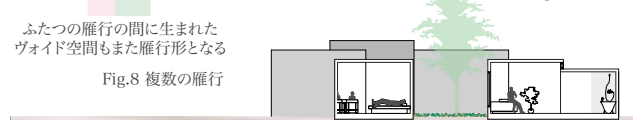


Fig.8 複数の雁行



Fig.10 Section



Fig.11 鳥瞰



Fig.12 内観



Fig.13 ヴォイド